

【研究ノート】

中国東北地方における端午節

—中国朝鮮族の事例をもとに—

小坂みゆき

1. はじめに

本稿は中国東北地方における中国朝鮮族の端午節についての事例報告である。筆者はこれまで「共食」の有用性を探るために、中国東北地方に多く居住する中国朝鮮族の食文化に関する調査・研究を行ってきた。その内容は、朝鮮半島からの移住という歴史をもつ中国朝鮮族の現在の食文化を調査し、その中にある「共食」の果たす役割を考察し、この考察を基に、コミュニケーションの手段としての「共食」の意義・有用性を明らかにしたいというものである。

そのため 2006 年には吉林市の農村部と都市部において、住居、台所、日常食、保存食、調理方法など食をとりまく行為や環境について、また、年中行事の1つである仲秋節での共食、日常での共食、地域の老人協会での共食、友人間で行う共食について調査を行った。

年中行事や通過儀礼には日常にはない特別な食事があり、それは、食べる物そのものに違いがあることはもちろん、共に食事をする共食の範囲も、親族全体、地域の住民など、家族を超えた範囲に拡大することが多い。そしてこのような食は、その民族の食に対する考え方や特徴をよく表すものといえることができる。このため筆者は年中行事および通過儀礼を中心に調査を進めている。対象とする年中行事は、元旦、正月十五日、端午、秋夕であり、中国では春節、元宵節、端午節、仲秋節にあたる。通過儀礼は、誕生、百日祝、婚礼、60歳の誕生祝、葬礼である。2007年には端午節を対象とした調査を行った。2008年には春節と通過儀礼を対象とする調査を行う予定である。

中国朝鮮族に関する調査を行う場合には、朝鮮半島からの移民という歴史の存在、中国社会の中の少数民族という枠組みの中での政治的影響、漢族など他の民族からの影響などが複雑に絡み合っ形成されてきたという特徴を考える必要がある。

現在の中国朝鮮族における年中行事や通過儀礼で見られる食の中にも、それが中国朝鮮族独自のものとなり、そのアイデンティティを意識させるものとなる過程で、他と融合したり廃れたりするもの、あるいは時代の変化により行われなくなるものが存在すると考えられる。

以上をふまえて、研究はまだ途中段階であるが、本稿では、2007年の端午節の事例から中国朝鮮族における端午節の現状とその際に開催される朝鮮族民俗文化祭を紹介し、年中行事としての端午節の現状と、これに代わる年中行事となりつつある朝鮮族民俗文化祭について見聞した結果を報告する。

2. 中国朝鮮族形成の歴史的背景と現状

朝鮮族が朝鮮半島から中国に移住したのは、一般には19世紀初頭と言われているが、16世紀から国境を越えて双方の往来があった。1860年から1900年にかけては朝鮮半島北部での大凶作、疫病の流行により中国東北地方へ朝鮮族の集団が移動した。20世紀に入り日本の満州国成立にともない多くの朝鮮族が朝鮮半島各地から中国東北地方へ移住した。

1945年8月、中国と朝鮮が日本の植民地支配・占領から解放されたが、帰るべき故郷がなくなった者や、引き上げる術がない者などは残留した。その後、1978年の文化大革命終結の

時期までは、民族教育を行うこと自体が「地方民族主義」として批判され「朝鮮語無用論」が唱えられる状態であった。中国の少数民族に対する政策は、1978年3月の中国共産党第11期中央委員会第3回総会において、文化大革命時の「少数民族抑圧」の政策が批判されて以後大きく転換をとげ、現在に至るのである。

2000年の人口調査(2003年国家統計局人口和社会科技統計司・国家民族事務委員会經濟發展司編 2003:749)によると、中国における朝鮮族人口は192万人で総人口の0.14%にあたる。東北地方の吉林省、黒龍江省、遼寧省の3省で合計176万人、全体の約91%がここに集中している。延辺大学国際交流センター副所長の説明では、中国朝鮮族の出稼ぎによる流動人口は年々増加しており、2007年度の中国朝鮮族の出稼ぎ者の数は北京、上海など經濟活動が盛んな地域へは約40～50万人、韓国へは約20万人、日本へは約5万人にも及び、家庭では親が出稼ぎに行っているケースが50%を越えているとのことであった。この傾向が続いた場合、中国朝鮮族学校の継続が難しくなり、民族の言語や文化伝承が困難になっていくことが予想される。

3. 先行研究

中国朝鮮族の端午節そのものに触れた文献は少ないため、中国朝鮮族について書かれた文献の中から、端午節に関する記述部分を整理して述べることにする。

金(1999)は、1994年から1996年の間数回にわたり、吉林省延吉市と龍井市、遼寧省瀋陽市、黒龍江省五常市などの朝鮮族村で、それぞれ端午節に食される特別な食物、遊び、菖蒲水で髪を洗い、蓬を扉にさす等の民間信仰について具体例をあげて報告している。しかし、これらの内容は現在行われている事と、かつて行われていた事との境界が曖昧で、その判断することが難しい。

韓(1994)は、吉林省永吉県樺皮廠鎮に属する行政村のS村を対象とし、元旦や端午節を含む6つの名節について調査を行った。おそらく論文が発行された1994年以前の事と考えられるこの報告からは漢族の習慣である粽は食べないが、蓬餅は食べること、当日運動会が開催されたことがわかる。また、都市部でも「朝鮮族運動会」が開催され、朝鮮族の人達が集まる機会が作られていることが述べられている。

李(2006)は、2002年に哈尔滨で日常食と特別食についての調査を行った。報告によれば端午節には、ゆで卵と蓬餅を食べる習慣があり、また、端午節の早朝に蓬を取りに行くという風習はすでにないと述べている。

千(1993)は、中国朝鮮族の風習に関する文献において、村人達は端午節に、シルム¹とクネトウイギ²をすると述べている。この風習は1992年においても見られることが報告されているがどの地域での事であるかが不明である。

以上の先行研究から、中国朝鮮族における端午節の習慣として、蓬餅やゆで卵を食べること、各地域でシルムやクネトウイギなどの遊びをしていたこと、また、これらを運動会として開催し行う地域があったこと、菖蒲水で髪を洗い、蓬を摘み扉にさすなどの民間信仰をかつて行っていたことが確認できた。しかし、それが現在も行われているかどうかについては確認することはできなかった。

4. 中国と朝鮮における端午節

端午節は旧暦の5月5日、新暦でいうと6月の中旬頃に行われる年中行事の1つである。

この時期は夏の暑さが本格的に始まる時期であり、また農作業の過程においては地域により差はあるが、かつては種まきが終わり一息つく頃であった。

中国朝鮮族の端午節に見られる特徴を調査する上で、中国朝鮮族が影響を受けたと考えられる中国漢族の端午節の習慣と、中国朝鮮族の母体である朝鮮での端午節の習慣を、由来、過ごし方、食べ物、娯楽などにつき文献に基づいて述べる。なお、朝鮮族や中国朝鮮族の遊びの名称については、朝鮮語の名称を片仮名で表記する。他にも朝鮮語の名称を使用する際は片仮名で表記する。また、現在の朝鮮半島は北朝鮮と韓国の2つの国家からなっているので、ここでは現在の朝鮮民主主義人民共和国に見られる現象は「北朝鮮」、韓国で見られる現象については「韓国」、朝鮮半島で見られる現象については「朝鮮」と表記し、区別する。

4-1. 中国の漢族における端午節

中国における端午節は、種まきが終わり豊作を祈る農業を司る行事からおこったものの1つである。これに、民間信仰の屈原や鍾馗の伝説が重なった。端午の時期には、邪悪なものが集まると考えられ厄を祓うための信仰が農事の節である行事に重なったと考えられている。

伝統的な風習は、雄黄酒を作り、腕に五綵糸を結び、居間には鍾馗の絵を飾り、門柱には菖蒲や蓬の葉をかけるということが行われていた。端午節の食物としては粽があり、これが家庭内で食された。この時期の戸外での遊びとしては、川や湖のほとりで銅鑼や太鼓が鳴らされ、賑やかな中で竜船競争と呼ばれる竜の頭を飾った船によるレース観戦が行われる。なお、竜船競争は主に長江流域以南に見られる風習である(廣居 1994:62)。

4-2. 朝鮮における端午節

朝鮮における端午節も種まきが終わり豊作を祈る農業を司る行事からおこったものの1つである。端午の時期は、世の中の全てのものが活動を始め、活力が最も旺盛な日であると考えられていたことから、厄を避けるのにふさわしい日と考えられたのである。

伝統的な風習は、菖蒲をゆでた湯で顔と髪を洗う。女性は頭痛を治すためにこの湯を飲む。菖蒲の根を削りかんざしをつくる。かんざしの端に、こよりをつけて髪にさす。これを「端午粧」という。門柱には鬼神と病気を祓う呪文を書いた護符を貼る。また、早朝に蓬を摘み束ね、扉の横にたてる(姜 2000:353-356)。

端午節に食べるものとしては、チョルピョンという糯米の粉と蓬の葉で作った餅や、車輪の模様紋をつけた、スリチュイトクと呼ばれる餅がある(朝倉 2005:152-153)。また、檀君神話の中で檀君の母が食べたことから神聖な物とされた蓬には厄を祓う力があると信じられており端午節には蓬がよく使われた(佐々木 2002:118-119)。

この日は農作業が一段落つき、時間的な余裕ができるため様々な遊びを行った。クネトウイギ、シルム、ノルティギ³、ユンノリ⁴等である。女性は普段なかなか遊ぶことができず、外出する機会も少なかったため、この日に伝統的な衣装を着てクネトウイギやノルティギで遊んだのである。

5. 中国朝鮮族における端午節の現状

5-1. 調査地の概要

吉林市は、吉林省にある8つの市の中の一都市である(図 1,2 参照)。吉林という名称は吉林烏拉(jilin ula)を簡略したものであり、満族の言語で川沿いという意味が含まれている(張 2005:62)。満州語で河は ula といい(津曲 2002:159)、吉林烏拉(jilin ula)とは、吉林市を南北に横切る松花江を指している。吉林市の面積は 27,722 平方キロメートルで、郊外には東西南

北それぞれに山があり、それらは竜潭山、朱雀山、玄武嶺、小白山である。

2006年の吉林市の総人口は430万人である（中華人民共和国民政部編 2007:40）。民族構成は漢族が圧倒的に多く、次いで満族、朝鮮族、回族、蒙古族、彝族、藏族、布依族、壮族、苗族の順にあげられる。中国朝鮮族は全体の約3%なので吉林市では少数派ということになる。

吉林市での調査期間は2007年6月15日から28日である。筆者は吉林市の都市部に居住する朝鮮族のM氏一家で2006年の8月と9月に調査を行っており、今回もM氏一家で参与観察と聞き取り調査を行った。

一家の家族構成は、2007年の時点でM氏46歳、妻42歳、長女19歳、長男5歳である。夫婦とも朝鮮半島南部、現在の韓国、慶尚道出身である。M氏は吉林市近郊にある自動車工場で働いているため、家で過ごすのは週末だけである。長女は従兄弟と上海に出稼ぎに行っている。長男は漢族の幼稚園に通っている。

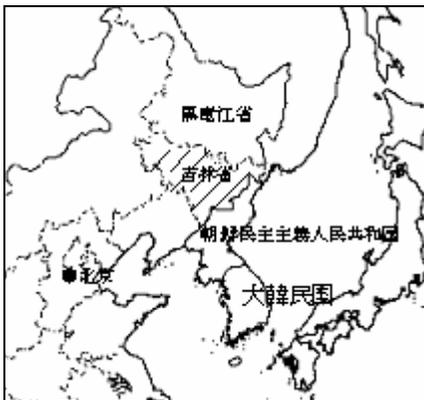


図1 調査地吉林省の位置



図2 調査地吉林市の位置

5-2. 現在の端午節

朝鮮における端午節も中国の漢族における端午節も、その由来は農業に関連するものであり豊作を願い、厄を避ける意味合いを含んでいた。しかし、現在の中国朝鮮族の人々の生活は、すでに農業中心から都市部での生活や出稼ぎを中心とする生活に大きく変化しており、端午節もその実用的な意味を失ってきているのが現状である。

筆者が吉林市で調査を行った2007年の端午節は6月19日火曜日である。この日は法定の祝祭日ではないので、漢族や朝鮮族を含む吉林市の人々の生活は平日と同様で特に変化は見られなかった。

漢族の習慣にはこの日粽を食べるというものがあるので、仲秋節の時期のように、街が月餅の販売で賑わうような現象が端午節の伝統食である粽にも見られることを期待したが、特に目にする光景はなかった。仲秋節の時期にはそれに合わせた内容の広告がテレビで放送される。例えば「仲秋節には是非〇〇洗剤を贈りましょう」などの広告である。しかし、端午節に合わせたこのようなテレビの広告は見ることがなかった。市内の中心部、繁華街の広場では仲秋節の一週間前から月餅販売のコーナーが特別に設けられ、スーパーの店内にも色とりどりのパッケージに納められた月餅専門の販売コーナーが設けられていた。しかし、端午節については、これに代わる現象は見られなかった。月餅は基本的に菓子類に属すが、粽は糯米でつくられた食物であり主食の代わりにもなる。月餅は1つ1つが綺麗に包装され、さらに箱に入れて販売されているものが多い。単品で家庭用に販売しているものもあるが多くは贈答品として扱われ

ている。郵便局でも月餅の販売と配送をセットにした企画がなされていた。しかし粽は月餅のように、個別包装され、箱に詰められることはなく、賞味期限の点からも現代風の贈答品としては使用されにくいのである。スーパーの店内に粽を販売するコーナーはあるが、小さく山積みにして売られている。購入した粽はそのままビニール袋に入れて持ち帰る。月餅のような外観的な美しさはない。市内のデパートの外壁に粽の宣伝をひとつ見つけたただけであった。

M氏の家では、2006年の仲秋節の時には夫の職場の漢族である上司から月餅を2箱もらったが、今回の端午節では特に何もなかった。また、朝鮮族中学校では学校から教師達へ月餅代として金銭が贈られるが、今回の端午節では特に何もなかった。

仲秋節の月餅は、商業ベースでも大々的に取り上げられ、それをやりとりすることが盛んに勧められるという状況であり、単に漢族にとどまらず、漢族の人々と交友関係をもつ人々にも影響が及んでいる。吉林市に住む中国朝鮮族の人々も例外ではなく、年中行事において月餅の存在を意識せざるを得ない状態にある。これに対し、端午節における漢族の粽を食べるといふ習慣は、粽という食品自体が贈答に必ずしも適さないものであることから、月餅のような商業ベースに乗りづらく大々的にやりとりを勧められるという状況にはない。漢族にしても、自分たちで必要なものを作りまたは購入し、親しい関係の者に贈ると言う程度である。

吉林市農村部と都市部に居住する40代から70代にわたる45人の男女に端午節に何か特別なものを食べたか、または漢族の習慣である粽を食べたか、という質問をしたところ、粽を食べた人は2名で共に漢族の友人にもらったからであった。ゆで卵を食べたのは35人だった。中国朝鮮族の中では、端午節に粽を食べるといふ習慣はほとんどないことがわかった。

筆者が滞在した家庭では、端午節の日、特別な事はいっさい見られなかった。筆者が今日は端午節だと言ったが、M氏の妻は端午節の日を把握していなかった。筆者が妻に端午節に関する何を何でも聞いていたからか、ゆで卵を作ってくれたが、端午節は特に何もしないとのことである。M氏の妻の生まれは1966年であり、ちょうど文化大革命が始まった時期である。よってそれが終わる10歳までは中国朝鮮族の習慣は当然のこと文化的な習慣は一切行われていなかったのである。筆者が朝鮮族民俗文化祭に行くことを妻に話したところ興味を示し一緒に行くことになった。

5-3. 朝鮮族民俗文化祭について

5-3-1. 文化祭について

吉林市では毎年、端午節の前後に朝鮮族民俗文化祭が開催される。2007年は第6回目であり、6月23日土曜日と24日日曜日の2日間行われた。場所は市内にある北山公園である。この大会の主催者は吉林市文化局の吉林市民族事務委員会であるが、実際にこれを請け負っているのは吉林市朝鮮族芸術群衆会館であり、実行委員も全て芸術群衆会館の人達で構成されている。芸術群衆会館の李氏に、文化祭が開催される目的や由来、運営などについて以下の話を聞いた。

端午節にちなんで文化祭が初めて行われた時期は定かではないが、1930年代頃から自発的に行われていたようである。政治的要因により中断していた時期があるが、1953年に吉林市芸術群衆会館が設立されてからは、一時期を除き、ここが主催して行っていた。2001年から吉林市政府の広場活動に指定されたので、そこから数えて今年が6回目になっている。ここ数年の参加者数は約6000人である。舞踊などに参加する人達の参加に必要な費用は全て自己負担である。見に来る人達は無料だが、公園内に入場するには5元（日本円にすると約75

円) 必要である。

大会の目的は、中国朝鮮族の文化伝承である。吉林市の行政が主催者であるが、運営費の多くは、朝鮮族が経営している歯医者、旅行会社や貿易会社等、合計 6 つの企業の寄付金及び、会場で出店している店の出店料などでまかなわれている。ボランティア等の手伝いは一切なく、一般の人が運営や準備の手伝いに携わることもない。

文化祭への参加は自由だが、プログラムの中に構成されている演目に参加するには、事前の申し込みが必要となる場合と実行委員会からの要請で参加する 2 通りがある。今年の参加団体数は合計 22 団体であった。要請を受けて参加した団体は、吉林市朝鮮族幼稚園の園児、吉林市朝鮮族小学校の学生、吉林市朝鮮族の中高生、永吉県朝鮮族第一中学校の学生、吉林市朝鮮族婦人協会、吉林市朝鮮族老人協会、吉林市朝鮮族鼓舞隊、韓国務安郡立國學院南道文化活動中心演出団体の計 8 団体である。他は各地域の老人協会や朝鮮族群衆芸術会館所属の歌手、舞踊団等で、個人参加もある。老人協会の団体は吉林市以外の地域からの参加も多い（表 1 参照）。

大会内容について筆者の観察結果に基づいて述べると、文化祭は 1 日目が午前 9 時から午後 3 時まで、2 日目は午前 9 時 30 分から午後 3 時までである。両日とも、正午から午後 1 時 30 分までは昼食の時間として催しは一時中断する。始まりと終わりはそれぞれ開会式と授賞式を含んだ閉会式がある（表 2 参照）。

	参加者/団体	備考
1	吉林市朝鮮族中学校	セレモニー参加
2	吉林朝鮮族小学	セレモニー参加
3	吉林朝鮮族幼稚園	セレモニー参加
4	永吉県朝鮮族第一中学校	セレモニー参加
5	吉林市朝鮮族老人協会	セレモニー参加
6	吉林市朝鮮族婦人協会	セレモニー参加
7	韓国務安郡立國學院南道文化活動センター演出団体	セレモニー参加
8	吉林市朝鮮族鼓舞隊	セレモニー参加
9	吉林市老人協会芸術団	
10	吉林市老人協会船管分会	
11	樺甸市老人協会分会	
12	吉林市老人協会昌邑分会	
13	舒蘭市老人協会	
14	吉林市老人協会炭素厂分会	
15	吉林市老人協会竜潭分会	
16	蛟河市鳥林老人協会	
17	永吉県口前鎮老人協会	
18	金達萊舞踊学苑	
19	磐石市区老人協会	
20	吉林市老人協会五七〇四厂分会	
21	蛟河市区老人協会	
22	吉林市老人協会阿拉底分会	
23	吉林市朝鮮族群衆会館	
24	個人参加者 7名	

日付	時間	活動内容	その他
六月二十三日 (一日目)	9時	開会式 審査委員入場と紹介 大型広場での舞踊披露 優秀演目の披露	朝鮮族民俗文化展・飲食文化展活動
	12時	屋食	
	13時30分	優秀演目披露 シーソーとブランコの披露	
	15時	終了	
	六月二十四日 (二日目)	9時30分	
12時		屋食	
13時30分		朝鮮族老人協会舞踊大会	
15時		表彰式・閉会式 後片付け	

左：表 1 2007 年第 6 回朝鮮族民俗大会参加者リスト
(筆者作成)

上：表 2 2007 年第 6 回朝鮮族民俗大会の流れ
(筆者作成)

大会の流れは大きく3つに分けられる。1つ目は開会式であるが、その内容は開会式に様々な舞踊を組み込んだものである。このことを関係者は大型広場集団舞踊と呼んでいた。2つ目は、要請を受けて参加した団体やある程度の訓練を受けている舞踊団の演目である（写真1）。3つ目は、個人参加者によるのど自慢と吉林市近郊の老人協会による舞踊であり、これらは審査され、優秀な個人または団体には賞が贈られる。賞品はタオルケット、食器、食品などである。

開会式で披露された舞踊以外は全て広場奥に設置された舞台で行う。開会宣言や閉会式での挨拶などは漢語で行われ、それ以外は漢語と朝鮮語の両方が臨機応変に、もしくは司会者の判断で話されていたが、圧倒的に朝鮮語が多かった。

ステージ前の広場の両側には、スンドゥ⁵、キムチ等の漬け物、トッポギ、キムパブ⁶などを販売する飲食文化展区と、韓国製の化粧品、健康食品、人形、キーホルダーなどを販売する民俗文化展区が設置されていた。飲食文化展区は多くの人で賑わっていたが、民俗文化展区での購入者は比較的少ない。他にビール会社が飲料と軽食をだす簡易型屋外レストランが設置されていた。

広場の周囲にある芝生には伝統的な遊びであるクネトウイギとノルティギが設置されていた。それぞれ自由に使用できる様になっており多くの人々が利用していた。かつて行われていたような試合形式にはなっておらず、伝統的衣装を着てクネトウイギをこぐ女性も見られなかった。

服装は、見に来ている人々は普段の服装で伝統的衣装を着ている人はいなかった。しかし、舞踊などに参加する人々はみな伝統的衣装を着ており、開会式に参加する人達や店の店員も伝統的衣装を着ているので公園内は非常に華やかであった。



写真1 ステージでの舞踊披露



写真2 昼食の様子

5-3-2. 昼食の様子

1時間30分の昼食時は、人々は公園内の広場から少し離れた場所に敷物を広げて食事をしてきた（写真2）。多くの人々は準備してきた物を食べていた。大会の1日目、筆者はM氏の妻と来ていたので、昼食は2人で食べた。食事内容は、キュウリ・パクチ・コネギ・ハム2種類、タッパに入れて持参した白飯と唐辛子味噌、筆者が用意したサクランボと水である。野菜は全て生で、それらに唐辛子味噌をつけて食べるという朝鮮族独特の食べ方であった。ハムも切っただけで加熱調理はしておらず、唐辛子味噌をつけて食べる。

食事をしている人達の構成は、家族・親族・友人などで、高校の同窓会を兼ねている人達も

いた。他に、演目に参加しているグループや同じ村の人々などである。食事は持参してきたものが中心となっており、タッパに飯や味噌を入れ、他に生野菜を持参しているグループが最も多い。敷物を敷きその中心に食物を置き、ビールやジュースを飲みながら食事をする。食後は敷物を片付け、太鼓をたたいて歌を歌ったり2人ペアになって踊りを踊ったり、1人1人が自由に踊ったりと様々である。

端午節に代表される蓬餅を皆で食べるという習慣は今では少なくなったが、持ち寄った食事と酒を囲んで皆で食事をし、踊りを踊り、歌を歌うということは盛んに行われる。これは、2006年に調査をした老人協会での共食においても同様であった。

中国朝鮮族を紹介した文献では、中国朝鮮族は「能歌善舞」であるとよく紹介されている。歌と踊りの才能に長けているという意味である。筆者自身も、吉林市に居住する他の民族の人から同様な話を聞いたことがある。

朝鮮族の伝統的な住居はオンドル式であるため、中国朝鮮族の人々はオンドルの無い部屋でも床に直に座る座式の生活をしている。この文化祭の昼食のように地面に敷物を敷きそこに座って食事をするという形は、机がないことを別にすれば朝鮮族が日常行っている食事の形と同様である。

6. 中国朝鮮族の端午節の現在と新たな年中行事

2007年の吉林市での端午節の調査によれば、吉林市に居住する中国朝鮮族の間ではかつての習慣はほとんど廃れていた。蓬餅は作られず、また買って食べるということもなかった。また、漢族から由来する端午節の食べ物である粽についても、漢族の知人から粽をもらうことがある場合は別として、これを自ら用意し、あるいは買い求めるという事は行われていなかった。しかし、朝鮮族の習慣の1つである端午節にゆで卵を食べるという事は、現在も尚残っており、その習慣を認識している人がほとんどであった。この習慣は李(2006:147)の報告内容とも一致している。吉林市は韓国系の食品店が少なく、蓬餅を売っているところは少ない。しかし、ゆで卵の場合は餅類の食品を作るのにくらべれば比較的手間がかからないこともこの習慣を残している一因と考えられる。ゆで卵を食べる理由や由来については今回明らかにすることはできなかったが、復活の意味との関連性がないか今後調査をすすめたい。この他、菖蒲湯で髪を洗う、菖蒲の根でかんざしを作る、蓬の葉を玄関にさすなどの風習は見られなかった。

中国朝鮮族の社会での端午節は、すでに農業との関わりが薄れており、端午節が農事の節を基本としていることを考えるとその前提を欠く状態にあるのが現状である。しかし、年中行事として、伝統的の衣装を着て伝統的な歌を歌い、伝統的な踊りを踊り、朝鮮族の形式で食事をし、スンデやキムパプなどの伝統的なものを食べ、伝統的な遊びをするという行事を行うことの意義は失われてはいない。端午節にかわり、人々を吸引する催しとなっているのが、端午節に合わせて開催される朝鮮族民俗文化祭である。地域レベルで開催されるこのような踊りや歌を中心とした文化祭は中国朝鮮族の人々にとって自らの文化を意識することができる場となっており、この地域の中国朝鮮族独自の行事と考えられる。歴史的にみると、1949年の中華人民共和国誕生後は、民族的祭事は迷信的活動として禁止され、更に1956年以降は、民族的差異を無視するという国家政策があり、1966年の文化大革命では、民族を主張するものは全て排除するという事態にまで立ち至った。民族の伝統文化が中国政府によって承認されたのは1978年である。中国朝鮮族の端午節のありかたもこのような社会的・政治的影響を受けてきたと思われるが、そのような中でも、中国朝鮮族の人々が、民族としての伝統・一体性を確認

するための行事を求め続けてきたのだということが、今回の調査でも感じ取れた。

朝鮮族民俗文化祭では、家庭内や親族内での集まりが中心となるのではなく、地域や仲間、友人、老人協会の人達の集まりが中心的役割を占め、食事もそのような集まりの中で行われていた。人々は、この文化祭に行くことにより、その人達との食事を共にする機会を得ることができるのである。人々はそこに集まり、それぞれの好みに合わせて歌を歌い、踊りを踊り、遊び、思い思いの場所で持参しあるいは買い求めた食物を仲間同士で食べるのが可能となる。

この朝鮮族民俗文化祭は、中国朝鮮族の人々が沢山集まったなかで行われるという点に大きな特徴があり、それがこの文化祭を彼らが楽しみにしている理由でもある。共食は、単に食事を共にするというだけのものではなく、食事を含めて、空間と時間を共有するという点でもある。そういう意味では、この文化祭においては、それぞれの人々がこの祭りで、歌、踊り、遊び、そして仲間同士で民族のスタイルで食事を共にするということを通じて、祭りに参加した中国朝鮮族の人々全体と共食をしているということが言えるのではないかと。

今回の調査結果から考えると、端午節という年中行事は、すでに中国朝鮮族の人々の多くが農業を離れ、生活習慣も変化していることから、廃れつつある習慣になっているという感がある。しかし、ある時期に、その地域の民族を同じくする人々があつまり、民族独自の食事を共に取り、共に歌い、共に踊るといった機会をもつということの意義まで失われてしまったということではできず、それは吉林市では朝鮮族民俗文化祭という行事に姿を変えて生き続けているように思われた。

端午節のような年中行事における共食は、その行事の歴史的・社会的意味づけの中において理解されなければならず、調査も端午節の周辺全般にわたるべきであると考えられる。その様な視点を含めて、他の年中行事や、通過儀礼を対象とした調査を今後の展望としたい。

謝辞

吉林市での現地調査で、労を厭わず生活や食事を共にすることを許して頂いた M 氏ご夫妻とその親戚の方々、快く聞き取りに協力して下さいました吉林市中国朝鮮族芸術群衆会館の方々、心から感謝申し上げます。本稿の執筆にあたり多くの助言・ご指導をいただいた北海道大学大学院文学研究科・佐々木亨准教授には深く感謝いたします。

注

- 1) シルムとは、韓国の伝統的な遊びの 1 つで、西洋のレスリングや日本の相撲に似ている。
- 2) クネトウイギとはブランコ乗りのことで、跳ぶ高さを競う。
- 3) ノルティギとは、女性が楽しむ韓国の伝統的な遊びの 1 つで、長い板の中央を支点にしてその両端に人が交互に上下する遊びである。
- 4) ユンノリとは、小さくて長い円筒形の木を縦半分に割った 4 つの棒と盤と駒を用いた遊びである。棒を投げて数字を決め、盤の上の駒を動かしながら遊ぶ遊びである（国立國學院 2006:260-261）。
- 5) スンデとは、豚の腸に血と味付けした糯米や春雨を詰めて蒸した料理のことである。
- 6) キムパブとは、海苔に飯をのせおかずをのせて巻いた料理であり日本の海苔巻きに由来する。

参考文献

朝倉敏夫

2005『世界の食文化1 韓国』東京:社団法人農山漁村文化協会

国立國學院編

2006『韓国伝統文化辞典』東京、教育出版社株式会社

国家統計局人口和社会科技統計司・国家民族事務委員会經濟發展司 編

2003『2000年人口普查 中国民族人口資料』上冊、北京、中国:民族出版社

韓景旭

1994 「朝鮮族の『明節』—中国吉林省 S 村の事例を中心に」『民族学研究』59:161-171、東京:日本民族学会

廣居健

1994 「小辞典 中国の年中行事」『しにか』12:56-70、東京:大修館書店

姜仁姫

2000 『韓国食生活史—原始から現代まで』玄順恵訳、東京:藤原書店

金善豊

1999 「歳時習俗の特性と変化」中国東北部朝鮮族民族文化調査団（代表:竹田旦）編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』393-432、東京:第一書房

中村喬

1994 「中国の年中行事とはなにか」『しにか』12:8-15、東京:大修館書店

千寿山 (qianshoushan)

1993 「宗教与風俗-朝鮮族風俗習慣」『吉林朝鮮族』401-422、吉林、中国:吉林人民出版社

2002 「21 世紀中国朝鮮族風俗展望」『跨入 21 世紀的中国朝鮮族』123-124、延吉、中国:延边大学出版社

李恩郷

2006 「異文化との食の接触における食の変容—中国東北部朝鮮族の食文化を事例として—」『国際開発研究フォーラム』31:139-159、名古屋、名古屋大学大学院国際開発研究科

佐々木道雄

2002 『韓国の食文化史-朝鮮半島と日本・中国の食と交流』、東京:明石書店

高崎宗司

1996 『中国朝鮮族—歴史・生活・文化・民族教育』、東京:明石書店

竹田旦

1999 「調査・研究の概要」中国東北部朝鮮族民族文化調査団（代表:竹田旦）編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』443-445、東京:第一書房

津曲敏郎

2002 『満洲語入門 20 講』、東京:大学書林

中華人民共和国民政部 編

2007 『中華人民共和國 行政区画簡冊』、北京、中国:中国地図出版社中国民族理論学会 編

張奮泉

2005 『吉林自助遊』、広州、中国:広東旅遊出版社

(こさか・みゆき／北海道大学大学院)